

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

第五福竜丸への想い

三好和夫

九月二六日に、第五福竜丸展示館の女性から徳島の拙宅に電話をいただいた。「福竜丸だより」に何か書くようにというお誘いがあった。そして、追いかけてその二回分を見本として送っていただいた。

「福竜丸だより」でいくつものことを教わることができた。第五福竜丸が大変な曲折の末にいまは夢の島に保存展示されていることは承知していたが、保存平和協会の発足以来一五周年を迎えたこと、「たより」には三宅泰雄会長が平和随想を連載してつつかい棒を通されていること、また、多数の方々がさまざまな立場から貴重な寄稿をされていること、などである。広島平和記念資料館、長崎国際文化会館からのメッセージも寄せられている。

福竜丸は、いまも、こんなに多くの人々からまもられていることを強く感じる。人の一生にも似た福竜丸の誕生から生きたち——このあたり私の知らなかったことが多い——そしてピキニでの被災を受け、その後の苦勞の多い

経過を改めて知らされた。私は、ピキニ被災二三人の人々の診療に当たったので、その人々と福竜丸をダブらせて考えてしまう。まず、三月一日の被災でよく福竜丸は母港の焼津に帰ってきたものと思う。被災者の診療が私たちの本務であったが、船室にも入って放射線汚染の測定にも立会った。

いまでも鮮明に想い起すことは、あの三月二五日の夜晩く、焼津病院の診察室で血液標本の顕微鏡をみていた私のところへ久保山愛吉さんが病室からぬけ出して一人で尋ねてきたことである。明日は米側の責任者が来るということを知り、その前にもう一度船室をみておきたい。何とかならぬかという。それは私としても必要なことであるので、翌日早朝に特別に小舟を出して貰い、二人で沖に繋がれていた福竜丸に行ってきたのである。三月二十八日には、全員米軍の飛行機で東京に移転、私も付添い同行した。それが私たちが福竜丸に乗った最後となっ

た。

昭和二十九年九月二三日に久保山さんは亡くなり、他の人々は三〇年五月に一応、焼津にお返しした。そして私は、昭和三二年には徳島大学に赴任し、その後の船員の人たちの健康管理は、東一病院(当時)の熊取敏之博士(後に放医研所長)に委ねることになった。専門学会での発表や学術論文の作成以外には、私は何もお世話することができなかつた。福竜丸の保存についてもそうであった。

今度お話を聞いて、福竜丸への追想は尽きないが、是非一度直かに会ってみたい気持ちで一杯になった。福竜丸はどうなっているだろうか、心ある人々にまもられて、そして、訪ねてくる若い人々に身をもって経験したことの大切な意味を語りかけてくれているだろうか。何か役に立つことがあれば、私も遅ればせながら可能な限り努めたいの念にかられている(十月九日)。

(徳島大学名誉教授)



『トビウオのぼうや…』をマーシャル語に訳す、元ロンゲラップ小学校の先生・アイゼンさんと島田谷子さん(マジュロ)

トビウオのぼうや、メジャト島に飛ぶ

一九八八年八月 マーシャル諸島から(2)

マーシャル語でとびうおをジョウジョウヨウという。この八月、日本のジョウジョウヨウがマーシャルの海を飛んだ。

マジュロに在住している島田谷子さんと元ロンゲラップの小学校の先生、アイゼン・メアリーさんの手で、かみしばい『トビウオのぼうやはびょうきです』(いぬいロンゲラップの子どもたち。メジャト島からイバイへむかう船の中で。チレス君(14歳・中段右から二人目)は、甲狀腺に異常があるというが、動作は大人のように、まさに小さな水夫だった。)

とみこ・作/津田 櫛冬・絵)が、マーシャル語に翻訳され、メジャト島、イバイ島に住むロンゲラップの子どもたちに、初公開された。なにも知らずに死の灰を浴びてしまった主人公のトビウオのぼうやは、島



初公開のかみしばいを見る、子どもたち(メジャト島)

専門家による展示館の調査 展示館の一層の充実を願い、修理・拡充のための対策を専門家と共に考えようとする第一回の会合が九月三〇日、展示館でひらかれました。東京大学名誉教授であり、建築家の大谷幸夫氏(千葉大学教授)が研究員と共に展示館を訪問、懇談のあと一時間余にわたって館の内外、船体をくまなく視察し、緊急に修理が必要な箇所をはじめ照明・空調・船体保護に関し全般的に問題点を指摘しました。事務室・資料室の建設や館の拡充についても意見がだされました。今後数回にわたり会合を重ね、報告書を作成し都へ要請していく予定です。会合には三宅会長、猿橋理事、川崎理事が参加しました。

九月二十三日に集い
九月二十三日、久保山愛吉さんを追悼していくつかの集いが展示館前広場でもたれました。午前中は東京原水協主催の第五福竜丸の集い。被団協代表の講演やスライド「太陽が落ちた」の上映が行なわれました。午後は平和と軍縮をめざす全国連絡会主催の追悼の集い。ビデオ「ピキニング」の上映と製作にあたった影山憲和氏の講演が行なわれました。また第八回久保山忌句会もひらかれました。



平和随想 (五)

三宅 泰雄

今年「部分的核実験禁止条約」(PTBT)がモスクワを舞台として、米・英・ソ三国間で調印されてから、ちょうど二十五周年になります。

それまで米・英・ソの三国は、大気中と海洋で傍若無人な核実験を強行し、地球上をくまなく放射性物質で汚染してしまいました。この乱暴きわまる所業への非難が高まり、国連でも、いくどか核実験禁止の要請が議せられました。

そのころ、私たちは、陸と海にふりそぐ放射性物質の測定に忙殺されてきました。環境の放射能は年毎に増えつづけ、遠からず国民に放射線障害をもたらし、食べ物もなくなるのではないかと心配していました。私は、この条約が

調印された直後に、新聞社からのインタビューをうけ、次のように答えています。

「科学者にとって、核兵器実験による放射能を監視し続けるのは、苦痛だった。これで助かった。この協定をさらに進め、一日も早く、核実験の全面停止と核軍縮を達成してほしい。」

条約の前文には、ひきつづき、核実験の全面禁止についても、交渉を進めると書かれてあります。各国はそれに好感をいだき、日本を含め、百二十カ国が条約に加盟しました。

一方、ソ連と仲違いになっていた中国は、米・ソ両大国のなれあいによる偽瞞であると非難しました。フランスもまた、条約に加盟しませんでした。当時、この両国は核兵器の開発に熱中し、フランスはすでに一九六〇年にサハラ砂漠での原爆実験に、中国もまた一九六四年十月に原爆、その三年後に水爆実験に成功しました。

この条約は思いもかけず、わが国の原水爆禁止運動にも、大きい波紋をまきおこしました。この年(一九六三年)の八月、第九回原水爆禁止世界大会が開かれました。

ソ連は条約に賛成、中国は反対といった複雑な国際情勢のあおりをこうむって、議論は沸騰し、收拾のつかない状態におちいりました。その結果、条約を支持する社会党総評系の一派は大会から脱退し、別に「原水禁運動を守る国民大会」を開きました。これが、原水禁運動分裂の最初の動機となり、その二年後に、新たに「原水禁禁止国民会議」(原水禁)が結成されました。

この条約は、結果的には核兵器の全面禁止と核軍縮へは、発展しませんでした。しかし、この条約により、一応、世界的な放射能汚染の危険から脱出することができました。その後も、成層圏にたまたまっていた放射性物質の降下がつづきはしましたが、時とともに、しだいに減少して行きました。

この条約の成立には、放射能汚染を憂えていた各国の科学者の要望にこたえ、一九五六年に新設された国連の「原子力放射線の影響に関する科学委員会」(国連科学委員会)の功績を見のがすわけにはゆきません。

私たち科学者は、この条約の歴史的意義と役割については、正当

に評価しているつもりです。

最近、ソ連のチェルノブイリ原発の事故による環境の放射能汚染が心配されています。たしかに、原発から三〇キロくらいまでの地域汚染は楽観を許しません。しかし、広域汚染についてはPTBT締結のころの方が、けた違いに大きかったのです。

一九四五年から一九六三年までの十八年間に、米・英・ソ・仏四カ国の行なった核実験は五二八回でした。これに対し、その後、一九八四年までの、「地下核実験」(中・仏の大気圏内実験を含む)は、実に九六五回にも達しています。

条約前文の「核兵器のすべての実験的爆発の永久的停止の達成を求め、交渉することを決意し」の「決意」が全くの空文にすぎなかったことに、私たちは遺憾の意を表せざるを得ません。

それにつけても、現在、米・ソ間でなされている戦略的核兵器五十％削減の交渉が、成功するかどうか、きびしく見守りたいと思います。

故木村莊十二さんを偲ぶ

能登 節雄 (映画製作者)

木村莊十二監督は一九〇三年(明治三十六年)九月四日東京三田四國町で生る。父莊平は明治中期牛鍋屋「いろは」を市内四十三軒開業。男十三人女十二人の子どもで十二番目で莊十二と命名、兄弟に莊太、莊五は文学に、莊八は有名画家、莊十は作家である、一九一二年家業没落、莊五に引きとられ独学する。

兄の關係した「白樺派文学運動」の影響を受け「新しき村」運動に



木村莊十二監督の80才を祝う会での木村夫妻 (1983年9月3日 新宿・独逸亭)

参加、特に音楽・作曲家を志向したが中耳炎にかりり止む。東京大震災を二十才に体験する、映画人を志望して古海卓二監督の紹介でタイトル係になる。京都へ移り阪妻、立花ユニバーサル映画に助監督として入社。河合映画、帝國キネマと転じて鈴木重吉監督の助監督につく、問題作「何が彼女をさうさせたか」で若くして補佐をする。二十七才「百姓万才」で監督に抜擢された。一九三二年帝國キネマは合併して新興キネマになる。「笑ふ父」の撮影中にストライキになり、監督の身ぶんで持前の正義感で労働者の味方してリーダーで会社と暴力団と警察等に向うにまわして大乱闘になり検挙された。首になり帰京した。同志松崎啓次と立花幹也らと音画芸術研究所を創立「河向ふの青春」で都市の労働者の闘いと農村の娘が売られる現実を新劇の薄田研二、滝沢修、宇野重吉らで画き映画界に大きな問題を投げた。

一九三三年(三十才)東宝の前

身PCLに入社、第一作「ほろよひ人生」楽しい音楽喜劇映画を作り、PCLの中心監督として活躍して東宝の前身の基礎を築く。一九四〇年まで八年間に二十本製作し、なかでも「放浪記」「兄いもうと」「彦六六ひに笑ふ」「からゆきさん」は代表作である。

一九四一年(三十八才)東宝と意見が合わず満州映画協会(満映)へ懇望されて日本映画監督協会から推薦され満映の映画技術向上につくした。終戦後一九五三年(五十才)帰国、近代映画協会・俳優座で初めてのユニカラー「森は生きている」「長崎の子」共同映画「うなぎとり」近代映協で子ども向け映画を作る。桜映画社でも社会映画の数々を監督した「未来につながる子ら」共同映画「子羽鶴」

「おおあなむちの冒険」で親子映画運動に参加した。

七十才で居住を江東区にて区内に働く人々の発展を願い「江東文化の会」創立し会長。子どもと地域文化の為みずから映写機を操作してミニ映画館活動も始めた。一九八六年(八十三才)日本映画復興会議より「特別功労賞」を、長年の映画内外の業績を讃えて受賞。

NHKの記録映画「廃船」の映像を初めて見たのは、江東区の木村氏の自宅でした。自から映写機を回して下さいました。賛助会員としても永く支援して下さいました。この度静江夫人より「核兵器のない平和な世界を強く願っておりました故人の意志で」と、寄付が寄せられました。本稿をお寄せ下さった能登氏は「第五福竜丸」(新藤兼人監督)の製作者の一人です。(編集部)

一九八七年には「下町庶民文化賞」を受賞す……生涯を通じ下町庶民の人情と生活、文化、平和を守るため献身、古くは浅草芸能人たちを映画界へ登場の道を開き「河向ふの青春」より数々の映画製作し、記録映画「東京の下町」の製作に對して――。

一九八六年九月脳硬塞にたおれ入院、十二月退院、翌年三月再発本年まで闘病生活、静江夫人の手厚い看護も甲斐なく一九八八年八月十日あと二十五日で八十五才を待たずに午前一時二十八分劇症肝炎で永眠された。

東京で生れ、庶民を愛し映画活動には情熱を燃やし平和を守り、子どもを未来を信じそして正義を貫いた木村莊十二監督は素晴らしい立派な生涯でありました。